

藤田富士夫

(埋蔵文化財センター所長)

1 はじめに

筆者は、ここ数年来、縄文人の数字認識問題にとりくんでいる。これまで高度な脳力を示す資料について何篇か論じてきた(藤田2007)。なかでも富山市の浜黒崎野田・平榎遺跡出土の「円盤形土製品」は高度な縄文人の脳力を直截に示している。

ここでは、それについての出土状況や資料の報告を主として行ないたい。

2 遺跡の位置と調査

遺跡は、常願寺川左岸の河口近辺に位置する。富山市浜黒崎の野田と平榎にまたがる108,000㎡にもおよぶ広大な地域に、「浜黒崎野田・平榎遺跡」が展開している。縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世の重複遺跡である。

円盤形土製品は、富山市浜黒崎(1区)1465番地に設けられた調査区1-2の西端域から出土した(第1図)。標高は約3.80mを測る。北側にJR北陸本線をはさんで浜黒崎字五百苅が所在する。そこはかねてより畑地で、昭和25年の富山考古学会調査による「富山縣石器時代遺跡地名表」(森1951)では「富山市浜黒崎 野田遺跡」とされ、「土器、石鏃、石斧、三頭石斧、曲玉、玉斧、石棒、石錘、石鎌、砥石」が出土するとされている。当該品の出土地点は、そこに南接している。

この一帯が、県営低コスト水田農業大区画ほ場整備事業の対象地となったため、平成6年度と7年度に試掘調査と発掘調査が行なわれた(小林・堀沢1995、鹿島1996)。円盤形土製品(報告書では「土版」)は平成7年度の発掘調査で出土した(鹿島1996)。

3 円盤形土製品の出土地点

遺物の注記は、「NH X3 Y-268 950912」とある。「NH」は、浜黒崎野田・平榎遺跡を表す。「X3」は公共座標の東西軸82403を、「Y-268」は南北軸10268を示している。「950912」は出土年月日。深度は、共伴した打製石斧(遺物番号118)から類推して「L(標高)2.8m」前後と思われる。出土層位は12層と15層との境目辺り。本調査区での遺物は主に12層、15層、16層から出土し、その包含層は30cm厚さとなる。円盤状土製品は、その中間にあたる層から出土した。第2図にその位置を黒塗りで表示した。調査区は、西側に向かって緩やかに傾斜し、そこは旧河川とされている。遺物包含層の様相は、旧河川跡を利用した土器廃棄場と見られている。包含層からは縄文後期後葉の八日市新保2式土器、晚期前葉の御経塚3式土器、晚期中葉の中屋式土器が出土している(鹿島1996)。円盤形土製品の厳密な伴出土器は不明だが、後期に属する可能性が高いと調査担当者は見ている。

4 円盤形土製品

円盤形を呈する(第3図・写真)。表面は黒褐色で、きめ細かな胎土を有し焼成は良好。直径4.2cm、最大厚さ1.4cm、重さ26.0gの完形品である。垂下孔を2個有するが、成形段階で紐づけの行為があったようで孔縁に紐線(紐擦れではなく)がくっきりと残っている。

表裏に横位沈線を配する。それに区画されて、円形刺突文=列点(小石の記数法)で①から⑪までの数字が配されている(以下、本品の数字を便宜的に○表記する)。

ここでは、私の読み解きを示しておきたい。

(1) 第3図右図の検討 右図の面には、数字①、②、④、⑥、⑨、⑪が付されている。これらの数字の総数は33になる。

①が、垂下孔二個の中間にあつて、他の列点よりもひと際尖鋭である。②が、中央の両縁に

ある。④の見極めは複雑で解説が要る。それは垂下孔が設けられた部位の横位帯一杯にほぼ等間隔で付されている。他の列点よりもやや太く粗野なタッチで付されている。この列点群は、一旦、認識できると、他との区別は容易に行なえる。⑥が、最下帯に横位列点で表現されている。⑨が、中央帯の上位列点群で表現されている。⑪が、⑨の下位に横位列点群で表現されている。①、②、⑥、⑨、⑪は横位配置の列点で分かりやすく付している。

(2) 第3図左図の検討 左図の面には、数字③、⑤、⑦、⑧、⑩が付されている。これらの数字の総数は33になる。

③が、垂下孔二個の上位に付されている。⑤の見極めが難しい。それは③と垂下孔二個の間に、上下不規則に付されている。③の列点群よりも少し小さな列点群で横位に付されている。それは垂下孔二個の上に位置する沈線のはみ出し粘土によって、左から4点目と5点目とがつぶれているが、列点痕跡が認識できる。他の列点が横位直線状に付されるのに対して⑤が上下不規則配置を成すのは、垂下二孔が先行して施されていて、それを避けて⑤群が付されたためと考えられる。一方、左から2点目は左の垂下孔穿孔粘土によって切られている(穿孔は右図面側から行なわれている)。左垂下孔の穿孔粘土が横位沈線に乗っている。

左垂下孔と列点の関係から、(a) 列点→横位沈線→垂下孔穿孔の順が推測できる。

一方、⑤群の不規則配置は垂下二孔の制約を受けていると見られ、かつ右垂下孔と列点の関係性から、(b) 垂下孔穿孔→列点→横位沈線の順が類推できる。

これらの観察が正しいとすれば、(a)と(b)のように施文順序が異なる。理由は定かでないが、右垂下孔を基点として左右で時間差を有している。横位沈線が左垂下孔から右垂下孔まで二条でやや太いのに対して、右垂下孔から右端部までは一条で単一的である。横位沈線は、一気に引かれたものでなく、時間差を有するであろう。(a)と(b)の施文順序の異なりは、列点、横位沈線、垂下孔穿孔がそれぞれ一括実施されたのではなく、先に施された文様(列点)が、後に消え、最終段階で一部が再施文されるなどしたためと思われる。このような背景によって⑤が「不規則」を示すのであろう。⑤は「特別な施文」であるらしい。

⑦が最下帯に横位列点で、⑧が中央帯の上位列点群で、⑩が、⑧の下位に横位列点群で表現されている。⑦、⑧、⑩は横位配置で分かりやすい。

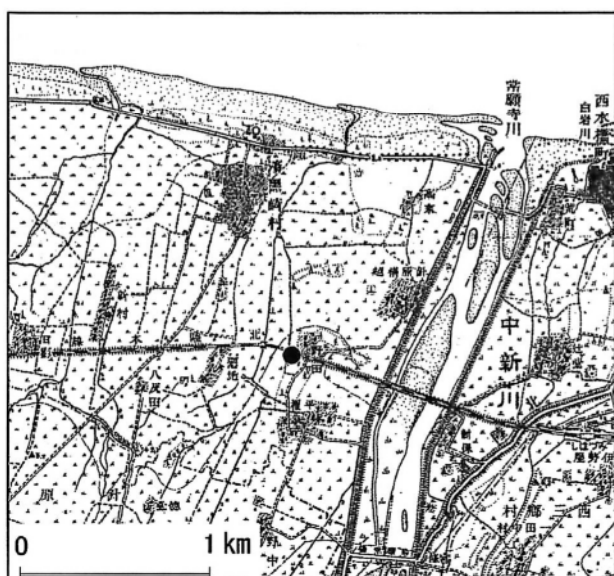
5 おわりに

本資料には、表裏に円形刺突文＝列点(小石の記数法)で①から⑪までの数字が列点の無駄なく配されている。表面(第3図右)に数字①、②、④、⑥、⑨、⑪を付し、裏面(第3図左)に数字③、⑤、⑦、⑧、⑩を付している。表裏数字のそれぞれの和は33になる。合計66である。ちなみにこの配分を問題設定すれば、「自然数①から⑪までを左右二列に順番に並べて、それぞれの和が33となるような配置を示せ」となろう。浜黒崎野田・平榎遺跡の円盤形土製品は、高度な算術を操る縄文人がいたことを示している。本品は縄文脳の具体資料として真に貴重であることは言うまでもない。

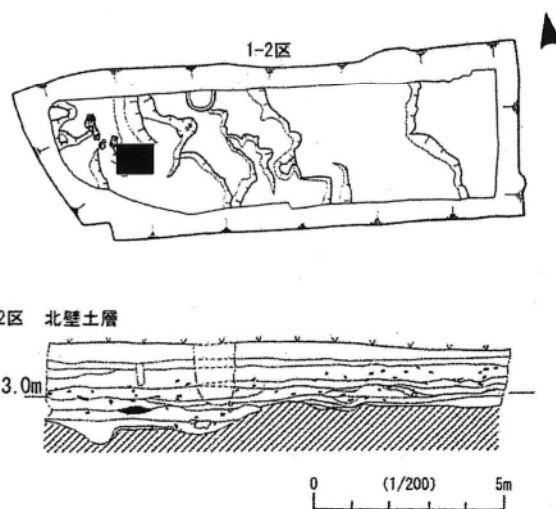
(調査を担当した富山市埋蔵文化財センターの小林高範主査学芸員から出土状況のご教示を得た。不備の諸点は、鹿島1996年報告など下記文献で補っていただければ幸いである。)

(参考文献)

- 小林高範・堀沢祐一 1995『富山市 浜黒崎悪地遺跡 野中新長幅遺跡 野田・平榎遺跡』
富山市教育委員会
鹿島昌也 1996『富山市 野田・平榎遺跡 野中新長幅遺跡 宮条南遺跡 高島島浦遺跡』
富山市教育委員会
藤田富士夫 2007「縄文人の記数法と“算術”の発見」『列島の考古学Ⅱ』渡辺誠先生古稀記念論文集刊行会
森秀雄 1951『大昔の富山県』清明堂書店



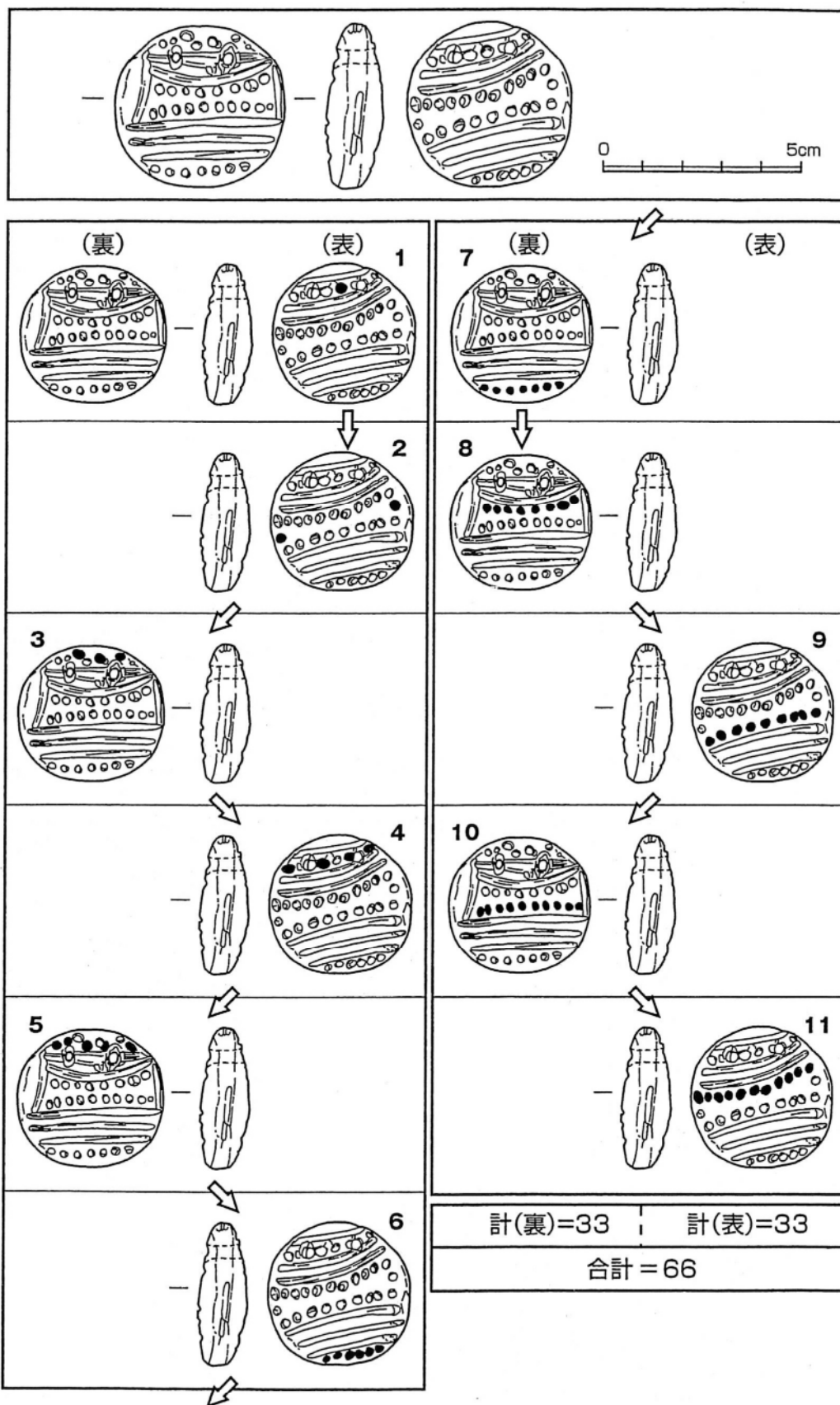
第1図 浜黒崎野田・平榎遺跡の
円盤形土製品出土位置図



第2図 調査1-2の円盤形土製品
出土位置と層位（黒塗り）



写真：左上（表）、右上（裏）、下（左上の二孔部分拡大）



第3図 富山市浜黒崎野田・平榎遺跡の円板形土製品（鹿島1996年を基に作成した。）